

≪研究報告≫

看護学生の感性を刺激する精神看護学授業の工夫

東中須 恵 子¹⁾

要旨：精神看護学の授業に学生の感性を刺激することを目的に、「絵本の抄読」、「感動探し」、「構成的グループエンカウンター」を教材として導入した。これらの教材が学生の感性を刺激しているかどうか、実施後の学生の感想文から感受性、自己受容、想像・直感に分けて評価した結果、すべての教材が互いに補い合いながら学生の感性を刺激しているということがわかった。感覚や知覚によって刺激された自分の心をありのままに見つめる自己受容は、「構成的グループエンカウンター」によって、他者からの自己のイメージ体験に五感を使って事象を感じる感受性は、「感動探し」で最も感性を刺激しているという結果が得られた。一方、自分の感じや考えているイメージを想像し、広げていく想像や直感には、「絵本の抄読」が最も効果的な教材であることがわかった。しかし、すべての教材が、自己の考えを発展し行動化しながら感性を刺激するための教材としては工夫が必要であることがわかった。

キーワード：教材、感性、看護学生、授業

はじめに

高橋（1997）らによると感性とは「価値あるものに気づく感覚で、ものやことに価値を見出す感覚の働きであり体験によって獲得され、他者からの働きかけを受け止めながら、表現をとおして身体を使うことで育てられる」といわれている。最近、教育の現場や企業などさまざまな場所で「感性」という言葉が使われるようになった。特に教育現場においては、登校拒否や高校中退者の増加などによる教育崩壊を乗り越えるため、子どもの心を育てる方法として感性教育を進め実践している学校もある。実践方法の一例としては、絵画をみてそのよさや美しさを感じるだけではなく、感じたことをお互いにコミュニケーションする心のコミュニケーションを目指しているという。片岡（1997）が「感性は、ものやことに遭ったときに価値を見出し求める感覚であり、社会的（人間関係的）価値にかかわる情操」といっているように、人間関係をどうやって築いていくかの自己の発見や、他者への気づき、それを伝えるために探求することを育てることは感性教育のねらいのひとつであると考えられる。

看護援助は対象者との対人関係を通じて行われる。特に精神看護学においては、コミュニケーションを苦手とする心を病む人が援助の対象であることから、対象の内面を洞察し理解しながらコミュニケーション能力を高めることが要求される。そのため、患者・看護師関係を理解し訓練するために、カウンセリングの技法やプロセスレコードを用いた教育方法が積極的に導入されている。しかし、看護学生の大部分は日常的な対人関係においても、話しかけたが平坦であったり、表情がなかったり、感情表出が出来ていないことが多い。相手の働きかけを受け止めたり自己や他者をみつめる感性の豊かさとコミュニケーションできる技術を体験的に学習することが重要である。

これまで精神看護学においては、看護場面において対人技能訓練の開発や看護学生の臨地実習におけるコミュニケーションの実態に関する研究が積極的に行われてきた。しかし、感性に関する研究は、1980年から1990にかけ28件の報告があるものの2000年には4件に減少している。芳賀（2003）の看護生涯教育として看護師の感性を高めるために「絵本の読みあいを導入したプロセスの報告」などがあったが教育、臨地におい

1) 弘前学院大学看護学部 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL: 0172-31-7156 (DIN), FAX: 0172-31-7101, E-mail: keiko@hirogaku-u.ac.jp

てはほとんど実施にいたっていない。こうしたことも鑑み、精神看護学の授業に、学生の感性を刺激し客観的に自己を振り返り、対人関係を学べるよう教材を工夫し実践してきた。今回、これらの教材が看護学生の感性を刺激し育てるための教材になっているかどうか考察する。

本研究における教材の考え方

1) 絵本の抄読

対人関係を発展させるためには、共通の体験のない人たちに自分の体験をことばにおきかえていくことが求められ豊かな感受性が求められる。鏡(2004)は「絵本は隠された表現の裏から、微妙な感情の動きや人生の機微を読みとるのは、子どもより、むしろ、大人の視点を意識しているのではないだろうか」といっている。絵本は、読んでもらうことにより耳で言葉を聞いて、目で絵本の挿絵を見ながら絵の中にある言葉を読んでいくといわれている。想像力を補い豊かにし、目の前のことをしっかり見て取る視覚的な力・調和を楽しむところが育てられているといわれている。学生が幼い日々を思い出し、自分の心について考える動機づけになることをねらい絵本の抄読を教材として導入した。

2) 感動探し

人は相手には見えない自己の主観的な体験を人に伝えるために、ことばという客観的な“もの”におきかえる作業をする。そのことばという“もの”を伝えるためには、体験を自分のなかで整理し、イメージを形にし整理しことばに置きかえそして、置きかえられた“もの”のなかに自分の気持ちがこめられているかどうかということを確かめ伝えていくといわれている。開放感を味わいながら目の前のことをしっかり見て取る視覚的な力と、自分の考えをことばにおきかえることの訓練は学習者として必要であると考え。内田(1997)は「実際に見たり、聞いたり、歩かせたりなどの実体験をさせることが大切だ。その体験は感性的認識に留まっているのではなく、言葉で表現できるレベルまで認識を深めていく必要がある」といっている。美しいものを美しいと感じる感覚や新しいものや未知のものに触れたときの感激など、さまざまな形の感情をよびさまし、他者に自己の見たことを言葉で表現す

ることができることを感動探しの教材の目的とした。

3) 構成的グループエンカウンター

精神看護は援助者自身が関係作りの媒体となることから、自分について関心を持つことは大切である。しかし、自分自身に気づくことや自分自身を受け入れることは難しい。河村(2005)は「最近の大学生は自分探しをしなくなった。……自分とは何者かという自己概念を確立しようとするのに向き合うほど、心の発達を遂げていない」といっている。また河村(2005)は「情緒的欲求や共感を求める欲求が満たされていないと自分を成長させようとする欲求は喚起されない」といっている。構成的グループエンカウンターは、リーダーが時間や人数を配慮した課題を提示しながら展開する、教育的側面の強いグループ体験である。グループカウンセリングに近いセッションの組み合わせにより自己・他者理解やメンバー相互の信頼感の育成、対人関係能力の育成につながる。自由で暖かい雰囲気の中で他者との交流を通して自分を見つめられることをねらって、構成的グループエンカウンターを教材として導入した。

研究目的

精神看護学授業に使用した教材が、学生の持っている感性を刺激したかどうかを明らかにする。また、感性教育を話題にした精神看護の可能性を探る。

研究方法

黒田(1997)の仮説によると、感性は感受性、自己受容、想像・直感の三つの要素に分けられ、それぞれの要素は感受性を中心にした同心円として構成されている。また、これらの三つの要素は共感的・呼応的關係にあるとしている。本研究では、この概念を用い、学生の感性が刺激されたかどうかの評価を、感受性、自己受容、想像・直感の三つの要素に視点をあてて行った。

学生の講義後の感想文から、感受性、自己受容、想像・直感の三つの要素を表現している部分を抽出した。

1) 用語の概念化

(1) 教材：学習内容と学習者の学習活動とを結合して、その目標を達成させるための教育素材 (2) 感受性：感じること・気づくこと (3) 自己受容：自分の欲求や衝動も含めて感じ考えること (4) 想像・直感：感じたことや考えているイメージを想像し行動化すること。

2) 対象者

看護専門学校3年課程1クラス36名全員(男性4名、女性32名、平均年齢20歳)

3) 倫理的配慮

授業開始毎に以下の点について口頭で説明し了解を得た。

(1) 資料を研究に使用させてもらうこと、(2) 参加の有無は評価や成績に関係ないこと。(3) 途中中断は自由であること。(4) 研究以外には使用しないこと。

実 施 内 容

1) 絵本の抄読

(1) 教材のねらい

体験をとおして多様なイメージに関わる情操を刺激する。

(2) 時間数 90分

(3) 実施方法

絵本の抄読においては5匹の野ねずみの話、レオレオニ著 谷川俊太郎訳(1984)「フレデリック」を使った。授業実施前日、全員に教材として使用する絵本のコピーを配布した。授業展開は、授業の導入に幼児期の体験で記憶に残っていることなど5～6分隣同士会話をさせた後、教授者が紙芝居風に絵本を見せながら読み聞かせた。その後自由に感想を述べ合わせた後、半紙に無記名で感想を記入させた。更に、教授者が3～4名の学生を指名し感想を述べさせ授業のまとめをした。

2) 感動探し

(1) 教材のねらい

学生の直接的体験を大切にしながら、感情に訴え情緒を表出させること。

(2) 使用時間 90分

(3) 実施方法

感動探しにおいては学生に開放感と自由を体感させるため、模造紙に歌詞を書き教授者が「このくらいのお弁当箱におにぎりおにぎり……」と学生の前で振りをつけながら歌った。一回目は学生が教授者の動作を観察しながら一緒に歌い振りをした。2回目は一番大好きな人のお弁当を作りましょう、3回目はアリさんのお弁当を作りましょうと、教授者が指示し学生は歌いながら振りをつけた。その後、校外を約20分間自由散策させた。散策中、自分が感動したものを3つ探してくることを課題にし、その間は他者とコミュニケーションしないことを条件づけた。教室に戻ってきた順番に4人から5人を人一つのグループにした後、半紙に感動したもの3つと感動した理由を記入させた。全員が書き終えたらグループで発表し合い、それぞれの感動を共有させた。グループの中から一人ずつ授業の感想を述べさせ、教授者が授業のまとめをした。授業終了後、感動したものと理由を書いた半紙を無記名で提出させた。

3) 構成的グループエンカウンター

(1) 教材のねらい

クラスという社会的な場面における人間関係的な場で示される自己を理解し、また、グループ成員をとおして他者理解をすることを授業の目的とした。

(2) 使用時間数 90分

(3) 実施方法

授業開始前に教室の中央を空けておくよう学生に指示した。授業開始は静かな曲を流しながら、万歳の動作、静の動作、誕生月の仲間同士グループをつくるなどを教授者が指示し、最終的に4人から5人のグループにまとまったところでエキササイズは終了した。教室内の好きな所に机とイスを自由に使ってグループの場を作らせ、自己紹介をさせている間、教授者はグループに半紙を配布した。グループメンバーに対するイメージと自分自身に対するイメージを10分間でそれぞれ半紙に記述させた。(グループメンバー同士で記述した半紙の交換をすることは伝えなかった。)その後、各自の記述したイメージを書いた半紙を該当者一人ひとりに手渡し、自分に対する他者のイメージを読み、意見交換をさせた。その後、半紙に自分の気持ちをクレヨンを使い絵で表現させた。書いた絵をグループ間で公表させた。グループから一人ずつ感想を発表させ教授者がまとめを行った。

表 1

分類	感受性 20件 27.3%	自己受容 35件 47.9%	想像・直感 18件 25%
絵本の抄読	<ul style="list-style-type: none">・仲間はすごく心の中が暖かいんだと思った。・人間は心がある。・人には感情がある。・温かい人ばかりだとどんなにいいだろう。・目に見えないことを感じながら生活しないといけない。・色や光が見えない時どうするのか。・色を感じられないときどうするのか。・本当に大切なものは目に見えないんだ。・働きながらだって太陽の色は感じる事が出来る。	<ul style="list-style-type: none">・仲間と一緒にだから見える。・寂しい印象がある。・個性が助け合えるかなと感じた。・絵本を見て懐かしさで一杯だった。・小さい頃を思い出した。・母を思い出した。・実家に帰りたくなった。・私は友達に気を使うのにフレデリックは怠けている。・個人の生活があると感じた。・フレデリックはいつも空想ばかりしているが自分はいつも現実ばかりみている。・友達は大切。	<ul style="list-style-type: none">・同じことをしていたらつらい日々をすごした。・心で何かを感じとり想像することは大切。・暖かそう・理解しあっている仲間というイメージ。
分類	感受性 28件 33.3%	自己受容 56件 66.6%	想像・直感 0件
感動探し	<ul style="list-style-type: none">・すがすがしい。・人の顔が晴れ晴れしていた。・わくわく。・毛虫を発見した。・鳥がさえずっている。・ぼかぼかした穏やかな陽気。・通しすがりの人のブラウスが風になびいた。・桜の葉っぱに穴があいていた。・梅雨明けを感じた。	<ul style="list-style-type: none">・疲れている自分がある。・自分の周りに感動するがものたくさんある。・心が洗われた。・教室が息苦しかったので開放感。・自分の中に入り込み自分を見つめ直した。・気を張り詰めている自分に気づいた。・このような時間を持つことは大切だ。・健康で嬉しい。・これから通学楽しみ。	
分類	感受性 12件 32.4%	自己受容 23件 62.1%	想像・直感 2件 5.4%
構成的エンカウンターグループ	<ul style="list-style-type: none">・ふーん そうなんだってって感じ。・嫌でない、いい気分。・自分を良く見ているという感じ。・自分と正反対な答えが返ってきた。・みんな幸せそうで良かった。・うれしいような恥ずかしいような気分。・びっくりするようなことが書かれてあり面白い。・花をもらった気分。・自分のイメージとみんなのイメージが似ている。・照れくさい。	<ul style="list-style-type: none">・ちょっと自分が大切に思えた。・知らないところでほめられていた。嬉しいな。・なんとなくすっきりした。・悪くはなくむしろいい気分だけど重い。・みんないいところだけみている。・当たっているのうれしいけど心は夜。・気分がいいので晴れ晴れとしている。・みんなのことよく書いたか心配。・他人が見た自分を知ってよかった。・実習で疲れているのに心はひまわり。	<ul style="list-style-type: none">・自分の個性を守っていこう。・一人、外で思い切り遊ぶ姿を思い描いた。

結 果

1. 学生の感想文から得られたデータを、表現が重複したものや明らかに同じ意味を持つものを整理して表1に示した。

1) 絵本の抄読

絵本の抄読で得られたデータの件数は全体で73件であった。教授者の語りかけのような口調に、学生たちは「緊張がほどけていった」「何故だか子供のころを思い出した」「懐かしさでいっぱい」など感想を述べあっていた。

(1) 感受性は20件で全体の27.3%であり、記述された学生の感想で最も多かったのは、小さい時両親に絵本

の読み聞かせをしてもらったことがあるので懐かしい、落ち着く幸せな気分になれるというものであった。

(2) 自己受容は35件で全体の47.9%であった。学生の感想は主人公のフレデリックの感性の豊かさに感動した、現在の自分について振り返った、友達の大切さがわかったなどであった。

(3) 想像・直感は18件で全体の24.6%であった。学生の感想は、暖かそう、理解しあっている仲間同士というイメージなどであった。

2) 合唱・感動探し

合唱・感動探しで得られたデータの件数は全体で84件であった。導入として取り入れた合唱と歌を歌いながら動作を模倣することについて学生は、最初恥ずかしそうにもじもじしていたが、2回から3回と数回繰り返してやることで声のトーンが高く晴れやかな雰囲気になってきた。笑い声や学生同士アイコンタクトや微笑み合う様子も見られ、周りがリラックスした雰囲気に包まれていった。

学生が感動したもので最も多かったのは自然への気づきであった。例えばボカボカした穏やかな陽気、目にした樹木や草花、鳥のさえずりで、また人々の動きなど見つめ通学路なのに気がついていなかったことの多さに驚いたと感想を書いていた。

(1) 感受性は28件で全体の33.3%であった。「梅雨明けのためか出会った人達の顔が晴れ晴れしていた」「風になびくブラウスがすがすがしい」「桜の葉っぱは丸く穴があいていて、毛虫がいることがわかった」などの感想が書かれていた。

(2) 自己受容は56件で全体の66.6%であった。「教室にいたことが息苦しかったので解放感」「自分の中に余裕を持つことができたので周りがよく見えた」「普通に生活しても感動はたくさんある」などの感想が書かれていた。

(3) 想像・直感は何件でもなかった。

3) 構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンターで得られたデータの件数は37件であった。学生は、ゲームによって親しくないクラスメートと同じグループになり、不安であったと述べていた。しかし、普段ことばを交わしたことがないクラスメートから、いい印象を持たれているこ

とがわかり複雑な気持ちも起こったが嬉しい気持ちでいることがわかった。

(1) 感受性は12件で32.4%であった。「それぞれ自己評価と他者評価を比較しクラスメートが自分をよく見ていることに驚いた」と、魚が群れで泳いでいる横で4～5人縄跳びをしている女の子を描き気持ちを表現していた。また、夏なのでと黄緑色のカマキリを書いた学生は、「落ち着かないので山に登りたい気持ちです」と他者評価が自分の思いと違うことに驚いたと感想を書いていた。

(2) 自己受容は23件で62.1%であった。「やっぱりそうなんだ」と感じたと、自分の考えていることと正反対な答えが返ってきたというその学生は、そのときの気持ちを笑顔の真っ赤な太陽で表現した。「みんなよくわかっている」と書いた学生は、暖色を使った色とりどりの花を描いて気持ちを表現していた。「花をもらうとうれしいようにみんなの意見をもらってうれしかった」と書いた学生は水色で透明な花瓶に暖色系のクレヨンを数種類使い一輪の花を描いていた。

(3) 想像・直感は何件でもなかった。「今の自分はなんとなくすっきりしたので、思い切り遊びたい」と書いた学生は真っ赤な太陽とさまざまな草花と青い雲を描いた。また、「今の自分は石です。気持ちいいけど疲れている自分がある」と書いた学生は灰色の石で自分の気持ちを表現した。

2. 教材の特徴

結果から学生の感受性を最も刺激していると考えられる教材は「合唱、感動探し」であった。「絵本の抄読」と「構成的グループエンカウンター」においては同じ結果であった。

学生の自己受容を最も刺激していると考えられる教材は、「構成的グループエンカウンター」であった。次いで、「合唱・感動探し」、「絵本の抄読」であった。

想像・直感を最も刺激していると考えられる教材は、「絵本の抄読」であった。次いで、「構成的グループエンカウンター」であった。「合唱・感動探し」は0人であった。

考 察

抄読は肉声によって、見えない内的な世界に刺激を与えることで情操が育てられるといわれている。ほと

んどの学生は幼児期に、母親など自分に関わった誰かから絵本を読んでもらった体験を持っていた。学生の情操はこうした幼児期の体験の振り返りと教授者の読み聞かせによって刺激されたのではないかと考えられる。また、情操は感動によって育まれるもので、感性へつながられるものであると考えられている。絵本の中に描かれている春の暖かい風景の発見により感動や精神的な安定が得られた。そのことによって学生の情操は更に高まり感受性が豊かになったと考えられる。感受性の高まりは、絵本に描かれている主人公の野ねずみフレデリックの生き方と、仲間同士の関係づくりについて考えを発展させることができたと考えられる。親友との会話であっても、自分の本音を語ることがほとんどないと話した学生のなかには、主人公フレデリックがわがままであるのに仲間に受け入れられているのは何故だろうと考えた。これまでの友人との会話は傍から見ると友人のペースにあわせることができており、よい関係にあると見られている傾向にある。しかし、友人との間に溝が出来たように感じることもあるのは、表面的な言葉あわせで終わっているからなんだと気がついたと感想を述べた。ストーリーを追いながら自己の人間関係に思いを馳せ自己受容へ発展していったのではないかと考えられる。学生はさまざまな思考の過程で自分の体験と絵本のストーリーとの間で幾つかの葛藤と遭遇していることが推測される。例えば、労働をしないでいつもぼんやり夢を追いつけるフレデリックに「仲間は働いているのに夢ばかり追いかけている彼は許せない」など憤慨している。しかし、飢えと寒さで凍えそうな冬に、フレデリックの暖かい語りに感動している暖かい配色で描かれた仲間の野ねずみの姿を見て「それぞれの持つ個性」を大切にすることを学んだと感想を述べた。学生は、絵本を読んでもらったという体験とその時起こった気持ちをことばにすることができた。また、本当に大切なものは目に見えないのだということを学んだと発言した。また、「人と精神的かわりを深めるために自分が常に人とかかわりの中で共感したり、感動したりすることが、その後の人や自分の人生を豊かにしてくれる」ということを気づかせてくれたと述べている。しかし、友人との関係をどのように発展させていけばよいかという、方法についての学生の意見はなかった。小田(1999)は「何かを伝達する者とされる者との間には目に見えない絆があってそれが話の本質を決定するとい

うことである」と述べている。指導者は、考えたことをさらに発展させ実践に移すための方法を示唆していくことが大切であると考えた。これらの学生の感想から、絵本は学生個々の情操を刺激し豊かにすると共に、自分について素直に振り返り感性を刺激する教材として効果的な教材であると考えた。

感動探しは、これまで学生たちが体験したことのない快適な授業だったと考える。授業の中で遊びに近い自由な時間を過ごせたことが、愉快感情と冒険心をかき立てていったのではないかと考えられる。遠藤(2001)は「自然体験などの活動は体験をとおして実感して感じ取れる感性や知を豊かに育てる意味で重要な働きを持っている」と述べている。学生は束縛されない自由な空間を与えられ、五感を研ぎ澄まして探するという体験をとおし自分だけの世界に浸ることができたのではないかと考える。学生から「入学時は驚きと感動の日々であったのに、次第に気を張り詰めているだけの自分に気づき、心が洗われた気がした」という感想が最も多く聞かれた。自然を眺め、人の動きを見つめることで自分の存在を確認することになったと考えられる。渡辺(1997)は「言葉だけでなく体験をすることによって豊かな感性が育まれる……体験では自分の五感を総動員するものです」と述べている。導入に取り入れた歌にあわせて振りをつけることを体験し、自由な感覚と自己の精神をゆとりあるものに展開でき自由な散策ができたのではないだろうか。学生の五感は開放感によって研ぎ澄まされ、普段目にしても感動することのなかった風にそよぐブラウスの袖、これまで見えなかった風の動きや虫食い葉への気づきが得られたと考える。こうしたさまざまな気づきが学生の感性を刺激し自己受容に繋がったのではないかと考えられる。学生の感情に訴え情緒を表出させることは、これらの体験を通して達成できたのではないかと考える。しかし、感じたことをイメージ化し行動することにはほとんど発展しなかった。自分の中に起きている現象を受け止めることは出来るが、自分自身の課題を発見し追求していくためには個人の持つ現在の体験上の課題を明らかにさせることが大切ではないかと考える。

構成的グループエンカウンターを国分康孝(1998)は「ホンネとホンネの交流であり、エンカウンターを要請する時代とは、①ふれあいが乏しく、②本当の自分が見つみにくい時代という意味で、現代人の抱える

問題は本当の自分がつかめない」といっている。

構成的グループエンカウンターにおける学生の学びは、他人が自分をどのように見て評価しているかという恐れや不安を持ちながらも自己の資質についての発見であるといえる。黒田（1997）は「発見とは、自己の殻を破るという自己実現の構想に気がつくことや幸福な気持ちになり素直になれた自分や、他人の評価を素直に認められることである」といっている。学生はこれまで評価されることに慣れている言動を示すものの、評価されることに不安を感じながら学習している傾向にある。特に臨地実習においては、これまで関わりの希薄であった臨地実習指導者や担当教員に、評価されることを意識して実習している傾向にあることは否定できない。

そのため緊張を取り除く目的でショートエクササイズを取り入れた。グループのふれあいと同時に自己表現できたことは、自分を飾らずに素直に自己を見つめるといふ、評価の段階へスムーズに進んでいったのではないかと考える。構成的グループエンカウンターの教材の結果は、自己受容が最も高かった。学生たちは、クラスメートからどのように見られているか不安を抱えながら、自分に渡されたグループメンバーの書いたイメージを読んでいた。笑顔であったり緊張と不安の表情であったりさまざまであった。しかし、意見交換は和気あいあいとした雰囲気であった。黒田耕誠（1997）のいう「内集団化ができ、他人の状況の認知が感覚的にできてきたということ」ではないかと考えられる。つまり、自分の殻を破ることが出来、自己実現のため連帯することへの躊躇が緩和されたのではないかと考えられる。クラスの中で親しく言葉を交わしていないクラスメートから、自分の満足する評価をもらったと思われる学生は、「よく見ていてくれたんだ」と、自分に関心を向けてくれていたことに対する恥ずかしさと嬉しさの混合した気持ちを言葉で伝えることが出来ていた。こうした個々の気持ちはクレヨンを使った絵と文章で表現された。ほとんどの学生はクレヨンを使うことで「幼児期に返ったようだ」「お絵かきのようで懐かしい」と感想を述べた。これまでの体験がよみがえり、感受性は高まったのではないかと考えられる。

これらは感動によって感性を刺激しようと考えた教材であった。人は成長発達に伴って感動を体験し、こうした体験が感性の基礎づくりになっていくと考えら

れる。人の見えない心に関わって看護職に携わろうとする現代の看護学生は感動することの体験をしているであろうか。片岡（1997）は「感性が育たないと理性は育たない」といっている。しかし、感動はその人のもつ表現力で表出することはできる。体験したことを表現させ、発展させる回数が増すことによって表現力は変化し、見えない人の心を洞察する力へと発展していくのではないかと考える。

学生個々に継続的な働きかけをすることで感性は刺激され、能動的に行動できる学生を育てることに繋がっていくのではないかと考える。

ま と め

得られた結果から、「絵本の抄読」「合唱・感動探し」「構成的グループエンカウンター」の教材が、学生の感性を刺激しているということがわかった。特に自己受容には効果的であるが、自己の感じや考えを広げ行動化へ発展する想像・直感への効果は期待できない。学生が自己の考えを表現し聞き手の考えを理解しながら活動へ発展する教材の工夫が必要である。

本研究はデータ収集と分析を研究者一人で行ったことから、妥当性における限界がある。また、感性をどのようにとらえるか評価の指標が今後の課題である。

付 記

本稿は、日本看護学教育学会第10回、11回学術集会上において発表したものを、加筆・修正したものです。

引 用 文 献

- 1) 遠藤友麗(2001), 感性教育のすすめ—心と知に働く豊かな感性の育成とその理論, 社会教育, 666, 8-13.
- 2) 服部祥子(2003), 日本の社会と家族の困難, 別冊発達, 27, 2-13.
- 3) 芳賀百合子(2003), 看護師の感性を高める教育システムの検討「絵本の読み合い」の導入, 看護管理, 33, 230-232.
- 4) 片岡徳雄(1997), 感性をどうそだてるか, 現代のエスプリ, 365, 92-99.
- 5) 河村茂雄(2005), 心の発達課題に適した援助とは, グループ体験による学級育成プログラム ソーシャルスキルとエンカウンターの統合, (5), 19-24, 図書文化社, 東京.
- 6) 鏡文子(2004), 絵本のこと, 3-4, 18-21, 日本児童文学.

- 7) 国分康孝(1998), エンカウターの原理, エンカウター心とところのふれあい(21), 3, 誠信書房, 東京.
- 8) 黒田耕誠(1997), 力動的な人格体制に位置づく感性とその評価, 365, 126-131, 現代のエスプリ.
- 9) 中川京子(2005), 遊びの中で育つ伝え合う力, 826, 35-39, 児童心理.
- 10) 佐藤良子(1999), 大震災と大学進学 親子関係の新しい一歩, 20, 11-18, 発達.
- 11) 多田孝志: 二十一世紀に必要なコミュニケーションとは, 826, 865-873, 児童心理.
- 12) 小田全宏(1999): 私的感情教育論, 感性教育による人間改革, 高橋史朗編, 明治図書, 東京.
- 13) 高橋史郎(1977), 教育現場の感性の捉え方, 365, 32-33, 現代のエスプリ.
- 14) 内田伸子(1977), 感性をことばでつなぐものとしてのことば, 365, 76-83, 現代のエスプリ.
- 15) 渡部邦雄(1997), 感性を捉えるシステムづくり, 365, 39-40, 現代のエスプリ.

IDEAS FOR PSYCHIATRIC NURSING CLASSES THAT STIMULATE SENSIBILITY

Keiko HIGASHINAKASU¹⁾

Abstract : In psychiatric nursing classes, an introductory test was conducted for the purpose of stimulating and nurturing student sensibility using "Summarization of a Picture Book", "Chorus and Quest for Excitement", and "Structured Encounter Group" as teaching materials. After the test, students were asked to answer questionnaires, subjected to content analysis for sensitivity, self-acceptance, and creation and intuition. Results indicate that all three materials stimulated and nurtured student sensibility by complementing each other. "Structured Encounter Group", "Chorus and Quest for Excitement", and "Summarization of a Picture Book" were the most effective materials for self-acceptance, sensitivity, and creation and intuition, respectively. However, for creation and intuition, only low values were obtained from all three materials. In conclusion, although each of the materials is useful for students in stimulating emotions and nurturing sensibility, further ideas are needed for material to stimulate creation and intuition aimed at the development and acting out of individual thoughts.

Key words : Teaching material, Lesson, Lecture, Student of nursing school

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University, 20-7 Minorichou, Hirosaki, Aomori pref., 036-8231, Japan